



うたた寝



川崎ゆきお

上田は横になった。疲れたからだ。布団の中なので、そのまま眠ってしまいそうだ。問題は
何もないはずだ。しかし、これは昼寝になる可能性が高い。問題があるとすれば、そのことだ。
ここで昼寝をすると、夜、眠れなくなる。眠れるのだが、寝るのが遅くなる。ここで昼寝をし
た分、眠くなる時間がずれるはずだ。しかし、このまま起きてられないほど疲れている。体は
睡眠を欲している。無理に起きていても、眠いだけ。そこで上田は決心をした。昼寝ではなく、
このまま思う存分寝ようと。つまり、夜に寝る睡眠時間と同じ時間を寝る。ただ、決心などし
なくても、そのまま目を閉じれば、その状態になるだろう。決心の必要はないが、今なら何とか
なる。睡眠不足で眠いのではない。疲れているのか体調が悪いのか、やたらと眠い。もしこれ
が体調の悪さからきているとすれば、寝るのが一番の薬。そして、自然な流れで、うたた寝に
となる。これは何の努力も必要ではない。眠りに落ちる寸前に、耳障りな音がしていた。寝
かかったところで、その音で戻される。誰かが甲高い声で喋っている。複数人間がなにやら
騒いでいる。これはもう夢の中に入ったのかと上田は思ったのだが、こんなうるさい夢はない。
眠りを妨げる大きな声なのだ。しかも非常にはしゃいでいる。特に女性の甲高い声が耳障りで、
その声が耳に入ると、ぐっと眠りから遠ざかる。半分夢の中に入っているのなら、映像がある
はずだ。確かに絵は出ていた。昔、ハイキングに行った山中での思い出が夢の中に出たり引っ込
んだりしている。水筒の水を飲むか、飲むまいかと悩んでいる夢。それが人の声でかき消える。
軽く目を開けると、眩しい。蛍光灯を消していなかった。それで、すぐに目を閉じる。人
の声、男女の声が聞こえる。何人かは分からない。キャーと、悲鳴が聞こえた。上田は驚
いて、目を開けた。目が覚めてしまった。原因は何でもないことだった。テレビをつけていた
のだ。テレビは自動的にスイッチが入ったのではなく、消し忘れだ。しかし、テレビがついて
いれば、すぐに分かることだ。気が付かなかったのは、画面に絵が映っていなかったためだ。
最近買ったこの液晶テレビは、人を認識するらしい。そして、テレビ前に人がいなければ、省エ
ネモードに入り、画面が消えるようだ。テレビより布団の方が低い。またはセンサーを傷害す
るテーブルがあったのだろう。だから、人物が関知できないので、誰もいないと判定し、切れた
のだろう。そして、布団から上体を起こすと、テレビがついた。液晶モニターだけがオンオフす
るが、音声は自動的に切れないようだ。了